



発行所  
公益社団法人 国民文化研究会  
(九州←東京←全国)  
東京都渋谷区東1-13-1-402  
振替 00170-1-60507  
電話 03-5468-6230  
FAX 03-5468-1470  
http://www.kokubunken.or.jp/  
E-mail: info@kokubunken.or.jp  
月刊「国民同胞」編集部  
毎月一回10日発行  
購読料 年間2000円

### 聖徳太子輪読会と企業経営

— 維摩経義疏 菩薩行品のお言葉から —

藤新成信

父が創業した会社（鋼製建具メーカー）を引き継いで経営を行つてゐる。十年前に創業五十年を期して「社是」を一新した。その「社是」とは「和を以て貴しと為す」である。その社是に基づく「経営理念」は「世の中に役立つものづくりを通して、謙虚な心で働く喜びを持ち、人としての徳を積み、世界と日本の平和と発展に奉仕する」である。朝礼、諸会議の度に皆で唱和して仕事をさせて頂いてゐる。わが社にとって仕事の目的とは「和」の実現であり、心をつにして世の中に役立つ製品を作つて提供することである。世のため人のために働くことによつて喜びを見出し、ともに学び合ひ、地域に貢献する企業となることを目標としてゐる。振り返つてみると、学生時代に国文研の合宿教室に参加して、黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本

文化創業」（以下「太子の御本」といふ書物と出会つたことがこの社是に至る始まりであつた。その出会ひ以来、諸先生や先輩方のご指導の下に太子輪読会といふ勉強のご縁をいただき、諸先輩や友人らと現在も続けさせて頂いてゐる。それは知識の習得ではなく、輪読といふ形で皆が順番に或いは一緒に声に出して読むことで、著者の思ひを辿つて、聖徳太子のお立場に迫らうとするものである。そして太子の人生観の偉大さに心打たれつつも、自づから生きる姿勢が正されるやうな勉強の仕方である。所謂「鑽仰研究」といふものかと思はれる。「太子の御本」の冒頭に故小田村寅二郎先生の次のお言葉が載つてゐる。「ここに、戦後二十一年を経過してやうやく復刊に辿りついたわけであるが、これからのちも、きつと大勢の青年・学生諸君がこの本に取り

組んでくださることと思ふ。なぜならば、現代日本の高校・大学の教育の中では、容易に得られ難い学問分野、すなはち『心の姿勢を正すための』学問の道が、著者黒上先生の若々しい情熱と熱烈な求道精進の背景のもとに、この書物の中に縦横に登場して来るからである」

この中の「取り組んでくださる」といふお言葉には、この「太子の御本」が安易な知的理解を完全に拒むほど難解な内容であるが故に、相当の情熱を以て取り組むべきものであることが示されてゐると思はれる。さらに聖徳太子への敬慕の念を持ちつつ、自分の人生体験に照らし合せながら、何度も読み返していく鑽仰研究の心構へが説かれてゐると思ふのである。「太子の御本」に「聲は以て意を傳へ書は以て聲を傳ふ故に書をば義を以て『佛の聲を聞く』と云ふなり。又見し聞し覺することば、書に依りて解を得るも亦稱して聞くと為す」（勝鬘経義疏）といふ一節が出て来るが、それは「姿勢を正して声に出して読むこと、そして人の声を聴くことが学問の基本であること、文字はすなはち『書』であり、文字は正に記した人の肉声を伝へるものであつて、その文字を見ることによつて『佛の聲』即ち

「真実の姿」を聞くことができる」といふ意味であらうかと思ふ。

二十五年前に社長に就任し、第二工場を作つた折に、私は恩師の故長内俊平先生からお手紙を頂戴した。美しく力強い筆跡のお手紙は太子のお言葉を以て私の思ひ上がり（おこ）と儻りを強く戒めて下さつたもので、大切な宝物となつてゐる。そのお言葉とは「『未學を軽んずるなく學を敬ふこと佛の如し』とは、下を慈（あや）み上を敬（た）ぶは天の大義なり。所以に外の老（おきな）子（こ）に云く、不善の人は善人の資（たすけ）なり。其の資を愛せずその師を貴（たが）はざれば智（ち）ありと雖も大いに迷ふと。又書（しよ）尚書（しやうしよ）に云く、予は天下をみるに匹夫（ひつぷ）匹婦（ひつぷ）も一能（よ）予に勝れたり」と。又百行（ひやくぎやう）に云く、愚人の徳（とく）は智者の師なりと、此の四は但言は少しく異なれども内意は皆同じ。然れば即ち儻（たう）は悪中の極なること明かなり」（維摩経義疏 菩薩行品）といふものである。コロナ禍の中で、時代は大きく変化し、デジタル技術やAIを利用した新しい社会変革が求められてゐる。若い世代からも学ぶことは多く、これから先も、太子輪読会を続けてお互ひに心の姿勢を学び合ひながら、より良い会社経営に努めて参りたい。

（日章工業株）代表取締役